



不登校スクール講師

## 日暮 有希 さん

34 ♀ A

趣味：ジョギング

小学校1年生の時、星となった実の母。そして小学校3年生の担任森信子先生を心の母として成長した日暮有希さん。反抗期を乗り越え、今は不登校スクールの講師として教壇に立っています。

日暮さんにとって衝撃的だった母親の死でした。3歳の頃に発病し、6歳の時に帰らぬ人となりました。父親からは「お母さんは星になったんだよ」と言われても、母親の死を認められませんでした。学校から帰宅後、どこかに母親がいるのではと部屋中を探る日々が続きました。そしてだんだん無口になりました。

小学校3年生の『母の日』のこと。母親の顔を書いてくる宿題が出されました。毎年、この宿題が出されるたびに体調不良となりました。元々、体が丈夫ではなく、精神的な不安も重なり発病してしまうのです。

『お母さんがいない人は白いカーネーション、いる人は赤いカーネーションでしょ』と、どこかで聞いた話を担任の森先生にぶつけたのです。するとその様子を危惧した森先生は『先生をお母さんとして書いて下さい。学校では私が有希ちゃんのお母さんだからね』と不安定な心をなだめてくれたのです。その一言で閉ざされつつあった心が開かれていきました。4年生の担任も森先生となり、仲の良かった友達も同じクラスになりました。安定した精神状態で学校生活を楽しましました。

ところが高校1年生の時、校則が厳しく、その反発から顔を黒くして派手な化粧をする「ガングロ」になりました。と同時に不登校で出席日数も足りなくなりました。

「しかしこのままでは自分を見失うと思い、その仲間を断ち切るために退学を決意し、父親の姉が住む山梨の高校に転入しました」

都会とはまるで異なる田舎の生活に戸惑いながらも、友人たちの優しさに心がほぐれ、新たな高校では学級委員長や生徒会長を務めました。ガングロの不良少女は更生され、改めて母親の変わりに育ててくれた祖母のありがたさや父親の優しさを実感しました。いつも文句を言っていた祖母のお弁当も懐かしく感

じられたのです。

「都会と田舎では『友達』が違うことがわかりました。都会は友達といってもその場限りの薄いものでした。田舎は心と心がつながっているように感じました。今でも山梨時代の友人たちとは交流があります」

20歳の時に死に対する恐怖が襲いかかりました。そんな時にカウンセラーをしていた牧師先生に出会いました。その牧師先生から「あなたはこれまでどんなに辛い時も泣いたことがありませんね」と言われました。確かにそうでした。母親の死は悲しかったですが、父親や祖母に心配させてはいけなないと、ニコニコと明るく振舞っていたのです。つまり悲しみを心のどこかに封じ込め、それが精神的な情緒を崩していたのです。

「牧師先生のお話を聞いた瞬間に、涙が溢れてとまりませんでした。これまで我慢していたことが一気に溢れたのです。気持ちもスッキリし、不安も解消されたのです。愛情いっぱい注いでくれた父親、そして他界した母親に代わり育ててくれた祖母に素直に感謝できたのです」

このような経験が評価され不登校スクールから声がかかりました。さまざまな事情で学校へ通えなくなってしまった子供たちを受け入れる施設です。対人恐怖症や知的に障害を持って生まれた子など、1クラス20名ほどで編成されています。なかには精神病院に通院している生徒もいます。

グループワーキングをしていると、体の具合が悪くなったり、教室を飛び出したり、さまざまな行動を起こすそうです。人と話すことからの逃避現象だとのこと。

「ある生徒が『両親が亡くなり自分ひとりで生きていくことを思うと、何度も自殺を考えたけど、眼が不自由で空手をしている人と出会い、その人に生きていけばいいことあるよと言われたんだ。今は僕がその先輩のエスコートをしてるんだ』と話をしてくれたんです。生の声を聞き、少しずつですが他の生徒も刺激されています。私もこれまで何度となく精神的に不安定に陥りましたが、そこから脱出できたことを1人でも多くの悩んでいる方に伝え、人と関わり会話をする勇気を持っていただければと思います」

今を輝いて活きている日暮さん。その輝きは天国にいるお母さんにもきっと届いているに違いない。

- (1) what, ate, had
- (2) What, do
- (3) even
- (4) hurt
- (5) which, all.

